

日本事情 最終レポート

G15：金善恵

「やさしいミョンホさん」

目次

1. 紹介	2
1) 初めての出会い・印象	2
2) 魅力	2
2. ミョンホとのエピソード	3
3. インタビュー結果ラフ	3
4. この話をレポートに載せた理由	6
5. インタビューの結果わかったこと	6
6. 日本事情Ⅱを振り返って	7

1. 紹介

私がインタビューする人は私の友達のイ・ミョンホです。彼女は今韓国に住んでいて、年は私と同じく21歳で、女です。

1) 初めての出会い・印象

私がミョンホとはじめてあった場所は、インターネット上のあるサイトでした。そのサイトは、ある日本の文化が好きな人たちが集まっているところで、一緒に話したり情報交換をするサイトです。そのサイトにはチャット機能があって、私はそこでいろんな人たちとチャットをする途中にミョンホと偶然出会いました。

始めてミョンホにあった時はただ「ああ、いい人だなー」と思いました。特に悪い印象を受けたわけでもなかったし、ほかの人たちに礼儀正しく行動していたからです。時々「インターネット上では顔が見えないから」と無礼に行動する人がいるから、初めに会ったときにはなかなか心を開けなかったんですが、ミョンホの態度とか言葉遣いをみてなんとなく心を許したと思います。

そしてミョンホと私が同年代だと分かって敬語を使わなくなりました。そのサイトには年上の人も、年下の人もたくさんいたんですが、なんだか私たちの同年代はなかなかなくて、私たちはもっと親しくなったと思います。

そして、私は韓国の大田で生まれ、ここに来る前までそこで住んでいましたが、ミョンホと話をしている途中に彼女も私と同じく大田に、それも結構近い所に住んでいると分かりました。それで私たちはインターネットだけではなく実際にもあって遊んだりするようになりました。

2) 魅力

ミョンホは優しいです。私はその点がミョンホの一番いいところだと思います。今までの私の友達は、どっちかと言うと私が弱音をしたら私をしかるほうか、私に頼りながら自分の話ばかりするほうの人しかいなかったです。もちろんこれも悪くはないです。私の甘えをただ聞いてくれるのも悪いと思いますし、また私が誰かの頼りになるということは何かうれしいからです。でもやはり回りに自分の悩んでることを聞いて、それに助言をしてくれる人がいないと何か寂しいと思います。もちろん家族もいますが友たち以外には話しづらいこともありますから。

また私はとても強がりです。自分のつらいこととか、悲しく思っていることについてはよく話しませんが、ミョンホは時々何となくそんな私のことに気づいてくれて、ミョンホから「この頃、どう?」とかを聞いてきたり、反対に私から何かを話すとそれを聞いてくれて私を慰めてくれます。また私は思ってもいなかった観点で助言をしてくれます。そして、「頑張れ、あなたにはできるよ。」と言ってくれます。

こんなことを思うとミョンホはただ優しいだけではなくて頼りにもなる人だと思います。それで私は、ミョンホが私の友たちだと言うことに本当に感謝しています。またそんな人が私の周りにいることが幸せなことだと思います。

2. ミョンホとのエピソード

ミョンホと知り合って一番印象に残ることは私が日本に留学に来た日のことです。

私は日本に留学に来る日、飛行機が出発する時間が朝早くだったので夜明けの3時半ごろに空港リムジンに乗らなければなりませんでした。そしてそんな早いときにミョンホは私を見送るために空港リムジン乗り場まで出てきました。わざわざ私のため寝ないで出て来てくれたんです。もちろん前から彼女が「私も見送りに行くよ」と言っていました但实际上に出てくれて本当にうれしかったんです。

またミョンホはそのときに私がずっと必要と言っていたものをプレゼントしてくれました。私が特にミョンホに買ってもらいたくて言ったわけでもないのに、私自身がそんなことを言ったことすら忘れていたのにミョンホはそれを覚えていたのでした。

次はミョンホと初めて会った日のことです。ここでの初めて会った日というのはオンラインではなくてオフラインのことです。ミョンホも私もあの日別々の用事があったんですが、偶然二人とも市内にいたのでちょっと顔だけ見ようかなと思いました。それで携帯でメールをしながら打ち合わせをしてやっと本物のミョンホと会いましたが、何でかインターネットではよくも話していた二人なのに実際に会っては照れて両方とも挨拶をしてからは何も言わなかったんです。その後別れてすぐにメールをしながら「私達バカじゃないの？」といいながら笑いました。そんな初めてのことが今にも面白い思い出として残っています。

3. インタビュー結果ラフ

「インタビュー内容」

◎ 場所 - インターネットメッセージ「ネイトオン」

◎ 日時 - 2009・01・02

◎ インタビューの前に

彼女に日本事情といつ科目の紹介とインタビューの目的について紹介しました。

また、彼女にインタビューするために今までやってきた過程と何で彼女をインタビューするのかを言いました。また私が書いたテーマメモの内容についても話しました。

◎ 質問 - 中・高校時代のこと

↳ 理由 - 彼女とは大学2年生のときあったので中・高校時代には詳しく分からないから。

私「一番好きだった科目は？」

ホ「日本語！」

私「え？何で？」

ホ「うむ…一応ね、英語より易しかったから！そして、我が国と文法も似ているじゃない。それで覚え易かったの。漢字はちょっと大変だったけど。」

私「うん？漢字はなぜ？」

ホ「漢字…何というか、まあ漢字を覚えることも好きだったけど、何だっけ、あ、画が多かったり…この字がああ字みたいだし…」

私「似ている漢字が多い？」

ホ「そうね。とにかく画が多いのが一番嫌いだった。」

私「似ている字というのは、人偏とか、下敷遍の違いで意味が異なったりすることなの？」

ホ「うん？」

私「たとえば、成績の績と、面積の積とか、前のほうが微妙に違って意味が異なったりするじゃない。こんなことを言ってるの？」

ホ「ああ、まあ、それもそうだったし、とにかく画が多いのがいやだった。」

私「そうなんだ。」

ホ「覚えることが大変だったからね。後で見ると、前に見た字と同じだと思ったのに、違うとか…」

私「それで私は中国の人たちがうらやましい。漢字を使いまくっているんだもの。」

ホ「でも、その代わりに、発音というか、何だっけ…あ、声調が難しいじゃない、中国語は。」

私「まあね。じゃ、日本語が一番好きだったけど、一番高い壁は漢字だったんだよね？」

ホ「うん。」

私「その時は、ミヨンホちゃん漫画好きじゃない。それとは関連がなかったの？日本語が好きになったきっかけというか…」

ホ「なかった。なんとなく日本語が大好きだった。」

私「じゃ、嫌いだった科目は…英語？」

ホ「うん。」

私「普通、数学のほうがもっと嫌いじゃない？」

ホ「私は数学のほうが英語よりずっと楽だった。」

私「私は英語のほうが好きだったけど…」

ホ「私と英語は絶対親しくなれない。」

私「じゃ、なんで嫌いだった？英語は」

ホ「それが…私の中学校1年のときだったっけ。英語の先生が、授業の時間になると、毎日偶数の番号を読んで、英語の本文を読ませたけど、私がまた偶数で、毎

日呼ばれたんだよね。」

私「毎日…」

ホ「それもいやだったし、またその時は、英語の塾が流行っていたじゃん。で、みんな英語の塾通っていたんだけど、私は例外で、アルファベットしか知らないまま中学校に入ったんだよ。それで、単語も知らないし、読み方も知らないのに、英語の先生はそんなことについてちっとも教えてくれなくて、スパルタ式に授業をやらせたんだ。また、ほかの子達は、うまく読んだりするのに、私だけできないの。それでもっとストレスを受けて、本当にいやになったってわけよ。」

私「そうだったんだ。中学校に入ってすぐ、難しいものからやったの？私の学校では、アルファベットからやってたんだけど。」

ホ「そんなことしなかつた。うちはすぐに文法。はじめでの授業から。」

私「それって、ひらがなも知らない人に、漢字書け！というのと同じね。」

ホ「そうだね。それでとにかく私は中学校から英語は本当に嫌いだった」

私「私もそうだね。中学校のときには、英語が本当に嫌いだったけど、高校1年のときの英語の先生が面白い人でね、ちょっと興味を持ってたんだ。また、高2に会った先生にすごく憧れてたんだ。その先生は本当に自由に生きていて、旅行もよくするし、自分だけの確固な信念、価値観も持っているし、すごく素敵な人だったね。また、その先生が私の高校3年のときに担任の先生になって、失望させたくないから、英語の勉強に命かけてたんだよね。」

ホ「私は、高校2年と3年まで英語の先生が担任だったけど、2年のクラスがそのまま3年になってね、クラスメイトも先生も同じだった。それで、毎日英語の成績で圧迫されてた。試験受けたら、毎度私のせいでクラスの英語の平均下がったり…」

私「そんなことないよ。」

ホ「でも、数学はほんと好きだった。男の先生だったけど、説明が本当にうまかつたし、面白かつた。性格も男らしくなく澁刺かつたし。とにかくそれで、内容とかが頭の中によく入るような…それで好きだった、数学。」

私「ミョンホちゃんは理科に行ってもよかつたのかもしれないね。」

ホ「率直に私国語好きじゃなかつたら理科行つてたかも？」

私「私は、社会科目の先生たちがみんな面白い人たちでね、‘法律と社会’が本当に好きだった。また、余計にうちの学校では教えない‘政治’とかも特別授業でとつたり…」

ホ「私は地理！」

私「うわっ、私地理本当に嫌いつ。」

ホ「友達はみんな地理は眠いと言ってたけど、私は好きだった。地理の先生もいい人かつたし。」

私「結局、ミョンホちゃんは、面白い先生と相性が合うということだね。」

ホ「まあ... そうかな。」

私「じゃ、やはり英語の先生は嫌いだったのかな？」

ホ「うん。まあ、進度も進度だったけどね、先生なのにやる気がなかったのよ。その先生。ただ学生たちに本文読ませて、ただ終わりのチャイムになるとそれで終わり。」

私「そうだったんだ。それはひどいね。」

ホ「うん...」

こんな些細なことだけれど、今になっては身近にいながらではわからないことについていろいろ話しました。

4. この話をレポートに載せた理由

このインタビュー内容をレポートに載せることに決めに理由を話すと、たいした理由ではなくて、この中高校の話を一番楽しくしたし、終わった後にも印象深く残っていたからです。私もミョンホも自分のことを一番熱心になって話したところがこの部分だと思いました。

5. インタビューの結果わかったこと

毎日インターネットでよく会うミョンホだったけど、「今」のミョンホについてはよく知っているつもりですが、やはり人生で大事な一ページのミョンホの学生時代のことが知りたかったです。だから今回のインタビューを通じてもっとミョンホのことにについて知るようになってよかったですと思います。

はじめに好き・嫌いな科目のことについて話しましたが、結構ミョンホと私の好き・嫌いが異なっていて面白いと思いました。私は、私が数学が嫌いからほかの人もそうだろうと思い、それはまたミョンホも同じだろうと思っていました。でも、その考えは違って、またミョンホは、私の大嫌いな地理も好きだと言っていました。

それはミョンホも同じだろうと思います。彼女の大嫌いな英語を、私は必死にやっていたものですから。

また今回のインタビューで私とミョンホに共通点があることを知りました。それは、ミョンホも私も回りに影響を多く受けるということです。私は大嫌いだった英語を面白い先生と理想の先生に会ってからすきになり、ミョンホは数学を難しいと思ったけど面白い先生に会ってすきになりました。どれだけ面白い先生に会っても、授業についていけないと結局はだめなのに、二人ともその壁を越えるために頑張っていました。

また、私はミョンホとのインタビューの中で、もう一度ミョンホの魅力を感じることができました。

私は口下手で、また時々自分の言うことに自信がなくて戸惑うことが多いです。そ

れで今回のインタビューの中でも「これ言ってももいいかな」と思って返事をする
ことを長引いたり、つい自分のことを話すのに熱中になったり、別に関係のないこと
を話してしまったりしました。しかし、それでもミョンホは返事を待つことにあきない
で待ってくれたり、私の言うことに同感してくれたりしました。それで、自分でも
「やっちゃったなー」と思うところを、全然かまわないとばかりに、振舞ってくれま
した。

これは、どうでもいい、ほんの些細なことなのかもしれません。でも私にとっては、
ミョンホの本音のつんだ、私のことを考えてくれた気配りだと思いました。

それで、今回のインタビューは、ミョンホの中高校時代のことを知って、またもう
一度ミョンホの優しいところも知った、一石二鳥のインタビューだったと思います。

6. 日本事情Ⅱを振り返って

最初の授業に参加したときは、何が何なのか全然よく知りませんでした。けれど、
今になっては、なぜ先生が授業の内容をこのようなことに決めたのか、少しは分かる
ような気がします。

どれだけ親しくても、結局は全然違う他人について知って行く。それがどれだけ小
さなものであれ、そういう歩みをしていくことから他人と私の文化への触れ合いがで
きて、少しでももっと自分と相手のことを知り合うことから互いの関係は発展してい
く。これが私なりに出した「コミュニケーションすることの意義」です。

それで、今学期の「日本事情Ⅱ」の授業に参加して、いろんなことを考えることにな
り、とてもいい経験になった授業だったと思います。